身近な教材を用いて子どもの主体性を引き出す授業づくりの在り方

宮田　祐大
教育方法開発コース

１．テーマ設定の理由

（１）　現在の状況から

現在の教育現場では，学習指導要領（平成 29 年告示）にて「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）を推進すること[1] が求められている。文部科学省は，この授業改善を推進することで，児童生徒が「何を学ぶか」だけでなく，「何ができるようになるか」，そのために「どのように学ぶか」ということを考えながら，児童生徒に「生きる力」を育むことを目指している[2]。つまり，学びを人生に生かすための授業を行うことが重要である。また，文部科学省は加えて，学びを人生に生かすためには，同じ物事でも多様な捉え方をすることで以下の 2 点が人生を豊かにすると述べている[3]。

1. これまで気付かなかったことに，気付く
2. 考えもしなかったことにまで，考えが深まる

また，有田和正は「子どもが『わかっている』と思っていることが，実は『本当にわかっていないのだ』ということに気づかせること[4]」が新しい授業の在り方であると述べている。これらを授業で実践するための手段として，私は身近な教材に着目した。私は児童にとって身近な教材を用いたり，児童が学習内容を身近に感じることのできる手立てを講じたりすることで，「既知」だと感じていた事象から「未知」を発見できるような授業が展開できるのではないかと考えた。そして，このような授業を展開することで，児童が学習内容を自分事として捉えることができ，主体性を発揮して学習に取り組むことができるのではないかと考える。

２．基本的な考え方

（１）　身近な教材について

ここでは，児童の主体性を引き出す身近な教材とはどういったものかについて論じる。これについて考えていくうえで，そもそも「身近」とはどういうことなのかを論じる必要がある。そこで「身近」という言葉の意味を調べてみると，以下のようであった[5]。

1. 自分の身に近いこと。身に近い所。身辺。
2. 自分と関係の深いこと。日常慣れ親しんでいること。

つまり，この「身近」という言葉には「地理的，空間的，物理的に近くにあるものや人，場所」と「心理的に当人が近しいと感じるものや人，場所」といった意味が内包されていると考えられる。

また，小見和也氏は，中学校社会科の授業において，「身近」を①時間的に「身近」なもの（例：現代の海外情報），②空間的に「身近」なもの（例：近隣の古跡・博物館等）③時間的・空間的に「身近」なもの（例：市区町村行政）に分類し，研究を行っていた[6]。これを参考にしつつ，私は身近な教材に関して以下の３つの視点が重要であると考える。

① 空間的に身近な教材
② 時間的に身近な教材
③ ②以外の心理的に身近な教材

これらを単元やその授業内での課題・目標，児童の実態や学校の地理的条件などを考慮しながら授業づくり，実践に組み込むことで，児童の知的好奇心や学びへの主体性を引き出しやすくなるのではないかと考える。

（２） 主体性について

ここでは，上記で示した身近な教材を用いて引き出す「主体性」とはどのようなもので，どういった児童の姿を目指すのかを述べる。文部科学省は主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善，つまりアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善を提唱していた。このアクティブ・ラーニングについて文部科学省は，「子供たちの頭の中が「アクティブ」に働いているか？[7]」であると述べており，続けて「ただ話し合ったり，発表したりすることではありません[8]」とも述べていた。

また，澤井陽介は社会科の授業において，「いちばん考えている子は，授業中ひと言もしゃべらず，ほかの子供たちの発言をよく聴いている子かもしれないのです。[9]」と述べている。

つまり，児童の主体性とは，児童にとって単なる面白い教材の使用や対話型の授業を行うことのみで引き出すのではなく，教師が児童の実態に即して適切な教材準備や関わり方，授業方法等を用いることで成り立つものである。そして，挙手の多さや発言の量，にぎやかさや明るさといった目に見える子どもの姿だけでなく，子どもたち一人一人の思考がどれだけ深まっているかということをもって判断すべきだと考えている。これを踏まえ，今回は授業中の挙手や発言量に加えて，ワークシートへの記述の内容や，この単元の授業を受ける前と受けた後の児童のアンケート調査の分析とその変化をもとに見取っていく。

３．実践の概要

今回行った実践は，小学校６年生・社会科・「縄文のむらから古墳のくにへ」という単元である。この単元は児童が社会科の授業において，初めて歴史分野を学ぶ単元である。そこで，主題に迫るために以下の２つの視点から手立てを講じた。

① 身近な教材を用いた導入の工夫
② 学習内容を身近に感じるための工夫

①に関しては，学習内容に関連しつつ，児童にとって身近なものを用いることで，学習課題に取り組む主体性を引き出すことを狙いとした。また，単に身近なものを教材として用いるのではなく，上記にも示した「既知」から「未知」の事象を見つけ，知的好奇心を高めることができるような手立てを講じた。

②に関しては，①のような児童にとって身近なものを用いるのではなく，学習内容そのものを身近に感じることのできるような手立てを講じて主体性を引き出すことを狙いとした。歴史分野を始めて学ぶ児童にとって，歴史分野そのものが児童にとっては身近でなく，関心が高まりにくいものである。そこで，単元の導入である第1時に歴史を学ぶ意義について考え，学習内容を自分事と捉えることができるような手立てを講じたり，単元を通してのロールプレイングを用いた手立てを講じたりした。

４．実践の考察

上記の①の実践では，児童が日常的に利用する公園の文化的な資料を提示して授業実践を行った。その公園は児童にとっては，利用頻度の高い身近な公園であり，自らその公園について知っていることを発言していた。

しかし，学習内容と関連させて，提示した資料に関する発問を行うと，その発問に答えられる児童は，ほとんど見られなかった。つまり，児童にとっては，詳しく知っていたはずのことから，様々な知らない事象が浮かびあがってきたということである。そこから児童の関心は高まり，調べ学習での記述量や内容，それを学級全体に共有しようとする姿勢が強く見られた。これは，身近な教材を用いることで，上記でも示したような既知の事象から未知の事象を学ぶ授業が展開でき，児童の主体性が発揮されたために見られた姿ではないかと考える。

上記の②の実践では，単元の導入である第1時に，昔の人物や今の人物，有名な人物や身近な人物が歴史上の人物かどうかについて考えることで，いつの時代からいつの時代までが歴史の範囲といえるのかという疑問を考える授業を展開した。また，単元を通して「歴史調査隊の隊員」として，提示する「なぞ」を解き明かしていくといった設定やストーリー性を設けたうえで調べ学習やワークシートの課題に取り組む授業を展開した。

また，児童には上記の授業を受ける前と受けた後，それぞれで同じアンケート質問事項のアンケート調査を実施した。質問事項は以下の2点である。

① どのくらい社会科が得意だと感じるか。（1から10，理由）
② 社会科の授業で学んだことについて，どのくらい自分から調べたり，学んだりしたいと思うか。（1から10，理由）

これらの授業実践やアンケート調査の結果から，身近な教材を用いることや学習内容を身近に感じることのできる手立てを講じることで，学習課題や授業内で生じた疑問の解決などに主体性を発揮しやすくなるのではないかとい考えられる。それは「身近さ」が，児童にとって取り組みやすく，意外性も見出しやすいものであるのと同時に，その過程で学習内容が自分事となることで学びに向かう姿勢が形成されるからではないだろうか。

５．成果と課題

成果としては，児童にとって身近な教材を用いることで，既知の事象から未知の事象が発見されやすく，そこから知的好奇心が生まれることで，授業内外で児童が主体性を発揮するという研究結果を得ることができた。また，学習内容を身近にする工夫を行うことで，児童は学習内容を自分事として感じ，主体性を発揮することができるということも確認できた。そして，児童や地域，学校の実態を踏まえた教材研究やその教材を提示の仕方，その教材を活かす授業の雰囲気や流れを綿密に構築することが重要であることが分かった。

今回見つかった課題としては，1 つの身近な教材がどの地域，どの学校でも必ず効果的に扱えるわけではないということである。上述の通り，例えばＡ小学校で上手く扱えた地域教材がＢ小学校の学区にはないといったことや，教員と児童との教材解釈に差異により，扱った教材が，児童にとって身近であるとは限らないということもある。

このような，地域や学校の実態による地域教材の差や，教員が感じる身近と児童が感じる身近のギャップが生まれる可能性がある。そういった意味では，まだ汎用性の高い授業方法とは言えないと考える。児童の実態を十分に考慮することはもちろん大切だが，日々多忙な中，どの教科の授業でも軸となるような教育方法を見出していけるよう，今後も研究していきたいと思う。

注

---

1) 小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　社会科編, p.3
2) 文部科学省,「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」,
（https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/__icsFiles/afieldfile/2020/01/28/20200128_mxt_kouhou02_01.pdf）
3) 同上
4) 有田和正,『写真で授業を読む④　社会科「バスの運転手」有田和正の授業』, 明治図書, 1988 年, p.38
5) 新村出,『広辞苑　第 7 版』, 岩波書店, 2018 年, p.2815
6) 小見和也,「『身近』に学ぶ中学校社会科の教材開発と実践」「令和 4 年度課題研究報告書」（埼玉大学大学院教育学研究科）
7) 文部科学省,「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」
（https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/__icsFiles/afieldfile/2020/01/28/20200128_mxt_kouhou02_01.pdf）
8) 同上。
9) 澤井陽介,『澤井陽介の社会科デザイン』, 東洋館出版社, 2015 年, p.24